

広島大学高等教育研究開発センター 公開研究会  
『高等教育の国際化：利益とリスクの均衡』

*Internationalization of Higher Education: A Balance between Benefit and Risks*

平成 19 (2007) 年 5 月 15 日 於 広島大学高等教育研究開発センター

報告 JSPS 大学国際化支援本部調査研究アドバイザー

一橋大学国際戦略本部准教授

太田 浩

## 講演者

Dr. Jane Knight

Adjunct Professor,

Ontario Institute for Studies in Education,

University of Toronto;

Visiting Professor of Research Institute for Higher Education,

Hiroshima University

## 講演の概要

### I. 国際化とグローバル化の意味

#### 1. 概説

- グローバル化は国際化を促進（グローバル化は国際化の触媒）し、国際化はグローバル化の反応装置である。
- 国際化に関するコンセプトは、国際的な活動（具体的なアクティビティ）の観点から意味づけられることが多い。それらの活動とは具体的にいうと、学内や国内ではカリキュラム、教育/学習、国内出身の学生と教員、外国人留学生や教員、課外活動、研究を対象とする国際化と捉えられ、学外や国外に及ぶものでは、学生、教員、研究者の国際的流動性（海外留学・研修プログラム、外国人留学生、教員、研究者の受入れ等）、教育プログラムの国際的流動性（オフショア・プログラム、フランチャイズ・プログラム、ジョイント/ダブル/デュアル・ディグリー等）、教育機関の国際的流動性（海外ブランチ・キャンパス等）、プロジェクトやサービスの流動性（国際協力事業への参画等）などがあげられる。
- 大学の国際化への取組について、90年代は「アクティビティ・アプローチ（国際化に寄与すると思われる活動を次々と展開していく：分散型）」、2000年代は「戦略的アプローチ（まず、自己の大学の現況や可能性を分析した上で、国際化の戦略を策定し、それに基づいて組織的に国際化を図る：集中型）」と称される。

## 2. グローバル化の仮定義

- グローバル化とは、人々、文化、アイデア、価値観、知識、技術、そして経済などの流れが国境を越えることであり、それにより、相互依存、相互連携に基づいた世界を促進するが、そのインパクトは当該国の歴史、文化、伝統そして優先事項によって異なる。
- 上述の定義は、グローバル化をネガティブな面からも、ポジティブな面からも捉えておらず、ニュートラルな定義といえる。

## 3. 高等教育の国際化についての仮定義

- 高等教育の国際化とは、高等教育機関とシステムの目標、教育/学習、研究、サービス提供（大学の中核的機能）に国際的、異文化的、そしてグローバルな特質/局面を統合するプロセスである。このプロセスは、多面的かつ複雑なものである。よって、いわゆるアイランド・プログラムと呼ばれるような、国際的と称するプログラムを単に加えるだけでは、真の国際化とはいえない。そのようなプログラムは、既存の教育研究活動との統合が図られていないため、あたかも大学本体から孤立しているような様相を示す。実際にはこのようなケースが多い。極端な言い方をすれば、この国際化の定義から言えば、海外の協定校との交流や交換留学制度がなくても、大学の国際化は図られる。また、この定義ではインプットやアウトプットといった言葉は、昨今のアカウンタビリティやアウトカムの重要性が増している状況下においても、あえて使用していない。それはもし、インプット、アウトプット、ベネフィットなどの言葉を国際化の定義に使った場合、それは総称的でなくなり、特定の国、機関、利害関係者の優先事項を反映したものになってしまうからである。この定義はプロセス志向のものであり、アウトカム志向のものではないことから、定義そのものは、大学をどう国際化する/できるかということには触れていない。
- 国際化の定義は、文化、価値観、実用性、知識、制度、組織、機関などに関する概念に影響される。

## 4. 現実と複雑性

- 大学をめぐる外的環境の変化としては、知識経済、情報通信技術、市場経済、貿易協定、地域化、ガバナンスといった事項が高等教育に影響を与えるようになったことが挙げられる。また、高等教育内部の変化としては、マス化、公的援助の減少、アカウンタビリティ、民間資金の導入、商業化、アクレディテーションといった事項が大学のあり方に大きな影響を与えるようになった。

## 5. IAU 2005 国際化調査（質問紙調査）

- IAU（International Association of Universities）は高等教育機関レベル、国レベ

ル、国際的なレベルでの政策と実践を特徴付けるために必要な情報のベースラインを収集するための調査にコミットしてきた。この調査における IAU の役割は、大学の国際化に関して、変化する論点、トレンド、課題をモニターし、識別することである。この種の調査としては最大規模のものであり、2003 年を最初に今回の 2005 年、そしてその後も定期的かつ長期的に実施される予定である。2005 年の調査において高等教育機関レベルに関しては、質問紙が 3,057 大学の学長室宛に E メールで送られ、締め切りまでに回答のあった大学は 526 校で、回収率は 14.7%であった。国レベルについては、質問紙が 102 カ国の大学協会に送付され、18 協会から回答があった。

## 6. 分析のタイプ

- 集計（総計）分析：95 カ国全体の分析を行った。
- 地域分析：6 地域（アフリカ、アジア太平洋、ヨーロッパ、南アメリカ・カリブ海、中近東、北アメリカ）にわけて比較分析を行った。
- 人間（性）開発指数（HDI: Human Development Index）：下位・中位 HDI（57 カ国）、上位 HDI（38 カ国）にわけて比較分析を行った。

## 7. IAU 国際化調査のテーマ

- IAU による大学等の国際化の調査のテーマは、国際化の重要度、根拠、ベネフィットとリスク、国際化に関する機関レベルのポリシー、戦略、障害、国際化の成長領域、国際化における地域的な優先順位、外国語教育、国際化に関する国レベルのポリシー、プログラム、関係者（主体的な役割を担う者）、規定（規制）のメカニズム（大学の質保証やア Krediteーションに関する事項）、論点と課題である。
- また、この種の質問紙調査は、調査対象者に対して国際化の意識を喚起する副次的効果がある。

## II. IAU (International Association of Universities)調査の結果に関する概要

### 1. なぜ国際化か？ 機関レベルでの根拠

- 1 位：教員と学生の国際化（教員と学生の国際的な知的可能性・知識生産の増進）（22%）、2 位：研究力・知的生産力の強化（21%）、3 位：国際的なプロフィールと評判の創造（18%）、4 位：学問的な質の向上に対する貢献（14%）、5 位：教員と学生の源泉国・民族の拡大と多様化（13%）、6 位：カリキュラム開発・革新の推進（8%）、7 位：収入創出の多様化（4%）

### 2. なぜ国際化か？ 国レベルの根拠

- 1 位：競争力の増進（28%）、2 位：戦略的な同盟（20%）、3 位：人的資源能力の

向上（15%） 4位：国際協力と連帯（14%） 5位：異文化理解と啓蒙（9%） 6位：地域的優先度と地域統合（7%） 7位：教育輸出産業の強化（7%）

### 3. 国際化のベネフィットとリスク

- 国際化にはベネフィットがあると回答した大学は96%で、ないと回答した大学は1%、無回答が3%であった。
- 国際化にはリスクがあると回答した大学は70%で、ないと回答した大学は25%、無回答が5%であった。

### 4. 国際化において最も重要なベネフィットは何か（機関レベル）

- 1位：教職員・学生の国際化（国際的志向の教職員・学生が増加）（22%） 2位：学問的な質の向上（21%） 3位：研究力・知的生産力の強化（15%） 4位：カリキュラム、教育、研究の革新（14%） 5位：国際協力と連帯の増進（12%） 6位：教育プログラムとその適格性の多様化を増進（6%） 7位：国民的かつ国際的な市民性の涵養（4%） 8位：収入創出の増加（4%） 9位：頭脳獲得（2%）

### 5. 国際化に伴って最も重視するリスクは何か（機関レベル）

- 1位：商品化・商業化（23%） 2位：外国の学位製造所（工場）の増加（17%） 3位：頭脳流失（15%） 4位：エリート意識の増大（12%） 5位：英語の過度の使用（9%） 6位：文化的アイデンティティの喪失（9%） 7位：質を危うくする（低下させる）（8%） 8位：カリキュラムの均質化（7%）

### 6. 国際化の成長領域

- トップ5 1位：国際的な大学間協定とネットワーク、2位：学生に対する海外留学機会、3位：国際的な研究協力、4位：私費留学生のリクルート、5位：カリキュラムの国際的/異文化間的特質
- 中位—6位：教職員に対する海外留学・研修機会、7位：ジョイント/ダブル/デュアル・ディグリー、8位：国際開発・協力プロジェクト、9位：国費（公費）留学生のリクルート、10位：外国人客員研究員・教員、11位：地域研究、外国語を含む国際的な事項に焦点を当てた課程、12位：遠隔教育
- 下位 13位：外国人教員・研究員のリクルート、14位：教育プログラムの海外での提供（配信） 15位：国際的・異文化間的な課外活動、16位：海外ブランチキャンパスの設置、17位：地域を基盤とした文化的・国際的なグループの連携

## 7. 国際化の障害（機関レベル）

- トップ5 1位：教員の興味と関与の欠如、2位：国際化のプランを実施するためのスタッフの経験と専門的知識が限られている、3位：管理行政上の不活発（無力）性と官僚的困難性、4位：国際化のプロセスへ導く、ポリシーや戦略の欠如、5位：国際的な（国際関係の）業績が昇進やテニュア獲得のために評価されない

## 8. 大学の国際化における中央政府の主要なポリシー関連分野

- 1位：科学技術、2位：教育、3位：移民（入国管理）、4位：外交（外務）、5位：貿易、6位：産業（実業）、7位：文化

## III. 国際化の新しい方向性と新しい課題

### 1. 質保証とア krediteーションのシフト

- 学問的卓越性のための質保証・ア krediteーションから、国際的なブランド（世界大学ランキング）やプロファイルのための質保証・ア krediteーションへシフトしている。質保証機関は、国境を越える教育との関連から、国際化における国レベルの最も重要な関係者ということが今回の調査結果に出ている。
- 国レベルの質保証・ア krediteーションの拡大化、商業化、国際化が起きつつある。
- しかし、国境を越える教育に対する質保証・ア krediteーションは国レベルでも、機関レベルでもまだ課題が多い。

### 2. 国際協力・交流のあり方（価値観）のシフト

- 国際的な連帯・交流のための国際協力・交流から 国内の競争のための国際協力・交流へシフトしている。この二つのアプローチはお互いに相容れないものだろうか。また、このシフトは国際協力・交流の価値観の根本的な変化といえるのか。これら2つの点について、今後も注意深く観察する必要がある。
- 上述の変化は、知識集約型経済への移行が一つの要因であり、国内・国際を問わず、大学間のネットワークを構築する目的は、そもそも各大学の弱い部分を補い、競争力をより高めるところにあるといえる（競争力を付けるための協力）。また、高等教育の国際協力・交流において、機関レベルでの社会的・学問的志向の価値観や動機付けより、国レベルでの政治経済的要因と競争的観念がより重要視されていることも影響している。

### 3. 新しい教育提供者と関係者（国境を越える教育）

- 「新しいタイプの教育提供者」の多様化が起こっており、企業、民間公益団体、民間と公的機関の連携などによる高等教育への新規参加が続いている。昨今、民間企

業の高等教育機関が出現しており、これらは主として、利益志向型であり、株式会社の形態をとっていることが多く、国境を越えて教育サービスを提供（輸出）している。このような企業によって設置された教育機関やプログラムは、一般的に母国の教育システムの一部ではなく、正規のアクレディテーションやライセンスを母国や提供国で受けていることもあれば、受けていないこともある。この種の企業はローカルなものもあれば、多国籍企業もあり、Observatory on Borderless Higher Education の Global Education Index には 50 以上が掲載されている。これらの国境を越えた教育サービスを提供するものは、連携し、競争し、そして共存しようとしている。

- この新しい教育提供者は、革新的な提供/配信方法とパートナーシップを築いており、それが具体的にはフランチャイズ・プログラム、ダブル・ディグリー、ブランチ・キャンパス、仮想大学といった形態で現れている。
- この国境を越える教育に関する政策関係者は、科学技術関係、貿易、移民、人的資源に関する担当省庁である。
- 新しい動きである国境を越える教育とその提供者については、範囲とスケールを理解するために、より多くかつ正確なデータが必要である。

#### 4. 国際教育における援助と貿易

- 国際教育における援助と貿易の関係は以下のような変遷を見せている。

| 開発援助協力     | 学問的協力      | 商業的協力    |
|------------|------------|----------|
| 貿易をするための援助 | 貿易促進のための援助 | 貿易を通して援助 |

- 国際教育は、高等教育の商業化、市場化そして WTO における General Agreement of Trade and Services（サービス貿易に関する一般協定）の影響を受けている。

#### 5. 学問的根拠による国際化

- 大学の国際化は機関レベルでは現在でも学問的根拠によって導かれており、今回の調査でも、国際化の根拠として、「学生と教員の国際的な知識と異文化理解を増進するため」が 1 位で、「教員と学生の知的可能性・知識生産を増進するため」が 2 位であった。
- 大学の国際化において、根拠とベネフィットそして戦略は収斂してきている（これは、国際化のアウトカムが国際化の動機付けや期待とよくリンクしてきていることを意味する）。一方、国際化への期待と優先事項（地域的な優先順位：特定地域を対象とするか全方位的に世界全体を対象とするか）は、機関レベルと国レベルで分岐してきている。

## 6. その他

- 1 部局やセンターに特化した国際化の推進が大学全体に広がるような波及効果を期待する場合、大学内の縦割り意識が強すぎたり、財政的な支援等、十分なリソースが確保されない場合は、成功は期待できない。
- 大学の国際化への取組は、反応的 受身的 前向き（主体的） 戦略的と変遷してきている。また、戦略的な取組へと移行する過程でより高いレベルでのリーダーシップが求められることから、そのマネジメントは分散型から集中型に移行することが多い。